

離島の小規模グスクについて

當 真 嗣 一

(沖縄県立博物館)

1、はじめに

大学の史学科を卒業した私は、数年間の教員生活のあと文化財関係の仕事につくことになり沖縄各地の離島をまわる機会に恵まれた。時間を見つけては行く先の島々でグスクを訪ね歩き、これまで数多くのグスクを見ることができた。これらのグスクはたいへん優れた繩張りを持っており、^①こんな小さな島に何時、誰が、いかなる目的をもって築いたのかグスクに対する興味はつきないものがある。筆者は、こうしてグスクを歩くうちいつしかその魅力に取りつかれ、今ではブッシュをかきわけてグスクに入り遺構を読み解くことを中心的課題とするようになった。

グスクをめぐる研究状況は、いわゆるグスク論が活発に論議されているわりには実際グスクの中に足を踏み入れ過去から現在に残された遺構群を読み取りそれを繩張り図として記録するという基本的作業が手付かずの状態である。グスクを読み解く作業は筆者が再三指摘するとおり、県下各地に分布するグスクの中に足を踏み入れグスクの繩張り調査をおし進めていくことが大きな課題だと思われる。では繩張り調査とはどういうものであろうか。それは、グスクの中に入り地表面観察によって防御遺構を把握することを主眼とする調査でその成果を繩張り図としてまとめることである。^②こうして出来上がった繩張り図からはグスクの構造や性格・機能および防御の仕組みなどがよく理解できるものである。したがって、今後のグスク研究は、県下各地に分布するグスクの繩張り把握と、防御遺構の整理・分析という基本作業をおし進めグスクの繩張り研究を発展させていくことが必要だと考えられる。本稿では筆者がこれまで踏査してきた離島所在のグスクの中から、とくに沖縄本島の周辺にある小さい離島のグスクについて紹介し、これらのグスクの性格や機能について若干の考察を試みることにする。

なお、取り上げるグスクについては次の11の前提項目を設けた。

①所在地、②別称、③創築年代、④主要年代、⑤廃城年代、⑥主な城主あるいは築城主体
(以上③から⑥については主な合戦、普請および廃城などによって判断される年代だが、

古文書・古記録の少ない現状では伝承なども参考にして記入した)、⑦遺構の年代(出土した遺物や收拾した遺物の年代観を記入した)、⑧遺構、⑨城域、⑩高さ、⑪関連文献。

ヤヘーグスク

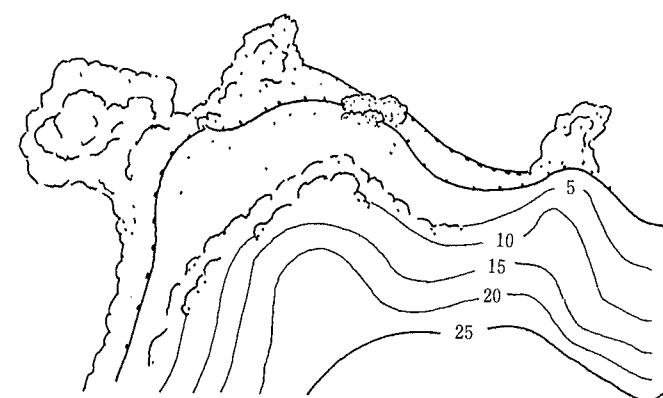
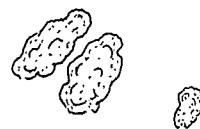
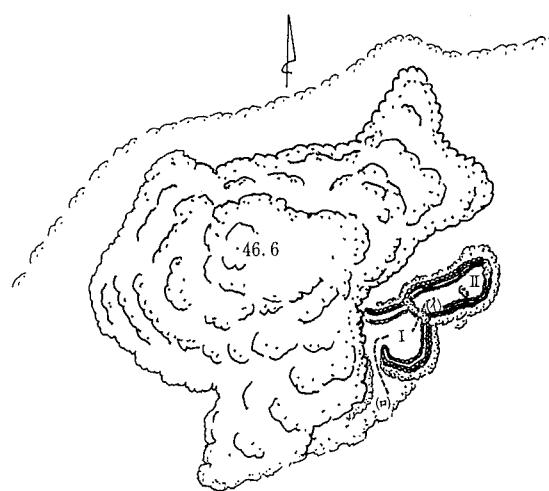
①伊平屋村字田名、②ヤヘーの大岩、③④⑤⑥⑦——、⑧野面積み石垣、⑨26m×13m、⑩比高約20m、⑪伊平屋村史

このグスクは沖縄県下で最も北に位置しているグスクである。グスクが所在する伊平屋島は周囲32kmの小さな島であるが、琉球諸島のなかではじめて統一国家をつくりあげた第一尚氏発祥の地として知られている。第一尚氏に次ぐ第二尚氏の出自もこの伊平屋島に隣接する伊是名島であり、琉球歴代王統の発祥の要因を考える上でこれらの島々は比較的重要な地域になっている。

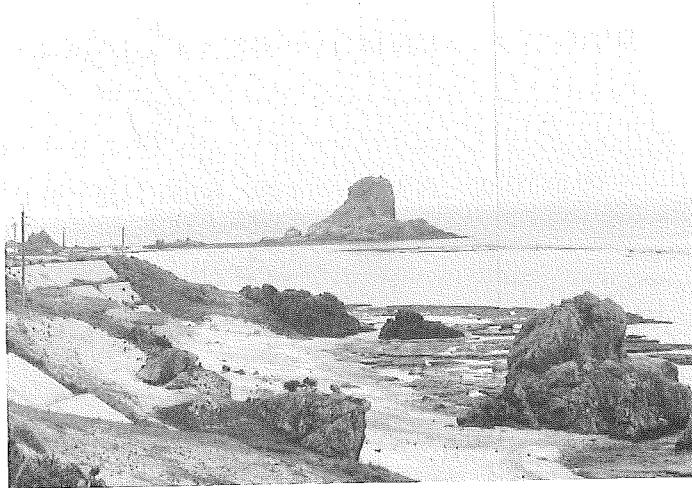
さて、グスクはこの伊平屋島の北海岸、環中国海に突出する岩礁の上に立地している。海岸べりから約200mほど沖合にあるため満潮になると歩いて渡ることはできない。島の人たちは「ヤヘーの大岩」と呼んでいる。^④

グスクは標高46.6mを測る岩礁頂部の東側裾に広がる岩盤の上に立地し、周囲を幅約1~1.7m程の石垣がめぐる。石垣の高さは、一番高いところで現在高約1m程でそう高い石垣ではない。ただ、石垣の幅が1m以上もあることから考えると、その高さは2mに程近い高さはあったと思われる。このグスク石垣は岩盤の上に積まれているので干潮時の岸との比高は約3~4mになる。城壁としては十分な高さである。

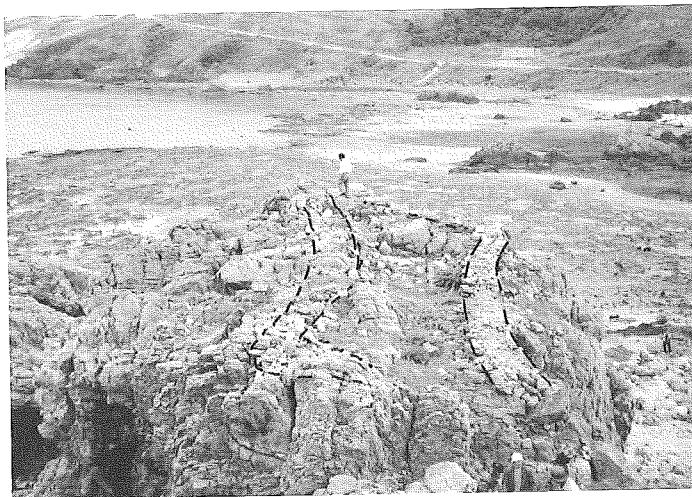
グスクは2つの曲輪によって構成されている。Iの曲輪は頂上46.6mの大岩に接するところの曲輪で80m²程の広さを有し、その中はほぼ平坦になっているが自然地形のままである。グスクそのものが岩盤の上にあるため地表土は非常に薄い。石垣の幅はIIの曲輪よりも約50~60cmも厚く築かれており、高さもIIの曲輪を取り巻く石垣より高くなっている。IIの曲輪は南北に細長く12m×4m規模である。曲輪内部は平坦となっているがIの曲輪同様自然地形である。表土が薄く岩盤が剥き出した状態である。IとIIとの比高差は約1mで段違いになっているが虎口らしい構造物が認められない。おそらく曲輪間の往来には木橋が利用されたのではなかろうか。IIの曲輪は幅1mの石垣が四方を取り巻きイ以外外部との往来が遮断される形となっている。城外からの虎口はI曲輪の西北西に開いている(口)。虎口の位置は、石垣が大岩と接するところの繫目付近に開いており、横矢を効かせた構造をとる。単純なつくりだが周辺には幅の厚い石垣をはりめぐらしており外部からの侵入に備え特段の注意が払われている。グスク内の広さや立地の点でみると恒常に人が住んだとは考えにくく、臨時的な城として理解すべきであろう。事実、グスク



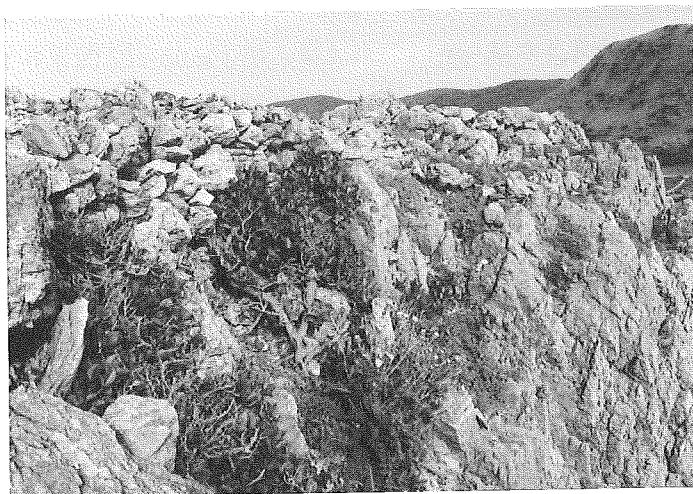
ヤヘーッスク



ヤヘーグスク遠景(東より)



ヤヘーグスクⅡの曲輪
----線は石垣の部分



ヤヘーグスクⅠの曲輪の石積
(西より)

内では遺物がほとんど確認できない。

このグスクで注目すべきは I の曲輪に隣接して標高 46,6m のピーク部を有する大岩の存在である。頂上に登ると眺望は素晴らしく海上を航行する船を捉えるのに適した場所になっている。現在ではロープ等を使わないと頂上に登れないがかつては I の曲輪と連絡の取れる箇所があったものと思われる。

築城年代についてははっきりしないがグスク時代に属する遺跡と考えられている。

伊是名グスク

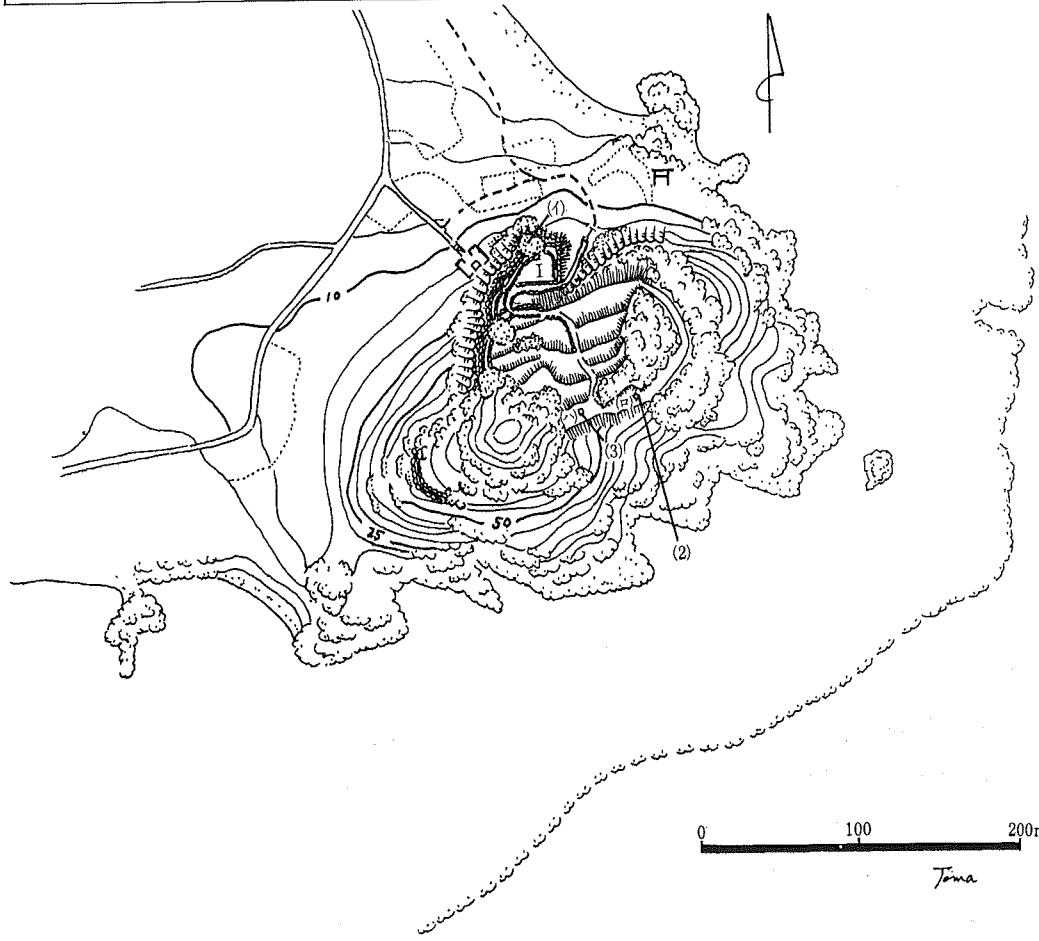
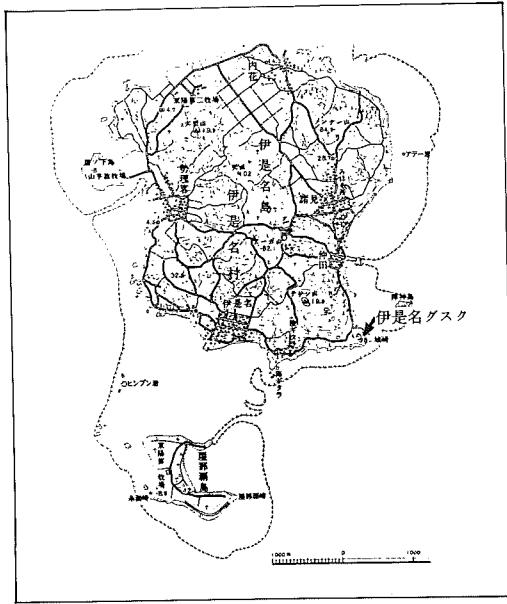
①伊是名村字伊是名、②伊是名グスク、③14世紀、④⑤——、⑥佐銘川大主、⑦14~15世紀、⑧野面石垣・切岸・井泉、⑨100m×50m、比高約 60m、⑩伊是名村史

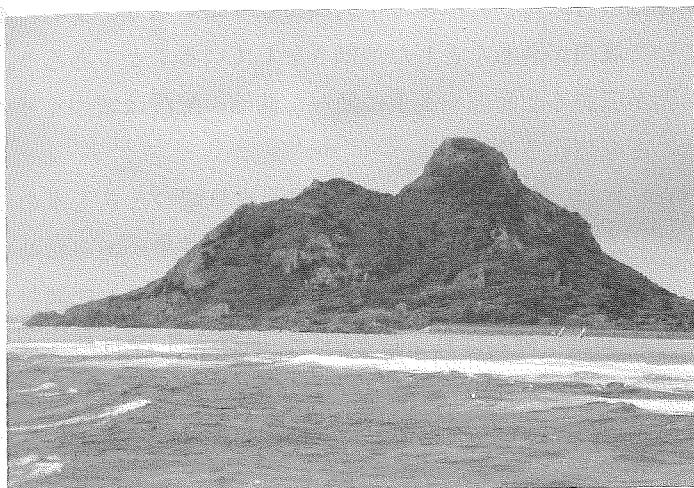
この城跡は伊是名島の東南端にあり、海に突出する円錐状の岩山に形成されたグスクである。伊是名島は沖縄本島北部本部半島の北方海上約 23km に浮かぶ周囲 17km の小さな島で、三山分立時代には山北王の統治する島であった。第二尚氏を打ち立てた尚円王の生誕地でもある。寛永 6 年（1629）頃の石高は 696 石余と記録されている。

伝承によれば、伊平屋の島主屋藏大主が伊是名島を統治していたころその子の佐銘川大主を伊是名へ派遣し、伊是名グスクを築かせ（または修築）この地を治めさせたという。^⑩ この佐銘川大主の子苗代之大親が後の第一尚氏王統を開いた思紹である。

グスクは東・西・南の三面が険阻な絶壁に面し北面だけは緩傾斜面になっている。各曲輪はこの北面の緩斜面部を削平して離段状に配置されている。先端の斜面上には曲輪 I がある。グスク内に入る者はこの I の曲輪に向かって否応なく右脇腹をさらけ出す恰好となるので、登り路を抑える曲輪であろう。曲輪の北側隅には隅櫓の機能をもつ自然の大岩（イ）がある。大岩の上からはグスクに登ってくる敵兵ばかりでなく、グスクの下に展開する城下集落（現在は伊是名古島として遺跡になっている）が俯瞰できる。城内への登り路は I の曲輪の北から東に回り込むようにして頂上へ向かって伸びていくが、その左右には小さな削平地が続き登り路の抑えとしている。

西側の崖の縁辺部は、平地からのグスクに攀じ登ってくる敵の侵入に備えて珊瑚石灰岩を利用した野面積みの石垣が約 3 m の高さで直に積まれている。グスク石積みはこの西側の崖の縁辺部と山の頂上部を越えた南側の平地に向かった傾斜面に認められる。石垣がこの地域に限られるのは、平地に面しているため敵の侵入を警戒したことである。つまりこのグスクの防御上の弱点をカバーするために石垣が築かれているわけである。繩張り図からもわかるようにグスクの東と南は、自然の断崖をつくり海に落ちるため敵を寄せつけない。だからこの部分には石垣が認められないのである。





伊是名グスク遠景(北より)



伊是名グスク(西より)
(斜面部分に曲輪がある)



伊是名グスク
(平たい石を積み上げた城壁)

ところで、このグスクの曲輪配置の特徴は、グスクの中央部を登り路が通り、左右に細長い腰曲輪を交互に張りつけていて城内がきちんとした地割りをしていることであろう。円錐形の岩山に占地し緩い傾斜面が広がる北面部を上手に使った曲輪の配置は城づくりの経験をもつた者の築城者がいたことを想起させる。

なお、グスクの頂上近くの（ロ）には、『琉球国由来記』に雨天や旱魃のときも水の増減がないと記載された「イシカ」^⑥と呼ばれる井泉（2）がある。この井泉があったせいで北山軍の水攻めにも届しなかったという伝説が残っている。この「イシカ」に隣接して「大城ミヤ御イベ」がある。この御嶽の神名は真玉森といい、旧暦7月17日の「ウンジャミ」には祭の場となる。現在は「諸見・仲田のナー」ともいわれ、「シヌグ」行事の際には、諸見と仲田の第1の拝所に位置づけられている。^⑦付近の削平地はウイミナーと称されているが、もともとは腰曲輪の一つであろう。

このウイミナーの西には「高城ミヤ御イベ、神名スエノ森」の御嶽があり、そこは小さな曲輪（ハ）になっている。現在瓦葺きの小祠が置かれている（3）。さらにグスク内には「伊是名ミヤ御イベ、神名伊是名森」と呼ばれるもう一つの御嶽がある。この御嶽はグスク内西側七合目あたりにあって小さな削平地になっている。防御のための石垣が若干認められることから西側から城内に侵入するのを阻止するために築かれた曲輪であることがわかる。

中心となる大きな削平地（曲輪）には遺物包含層が形成されている。表面踏査により14～15世紀に属する貿易陶磁器の破片も数多く採集されている。なお、採集遺物の中には高麗青磁等も含まれており注目されている。^⑧

伊計グスク

①与那城村字伊計、②イチグシク、③④⑤——、⑥アタヘチクドン、⑦14～15世紀⑧野面石垣・土塁・切岸、⑨150m×120m、⑩比高約40m、⑪『沖縄の城跡』新城徳祐著

伊計グスクは沖縄本島中部の離島字伊計集落西北西海岸、すなわち伊計島の船着場（現在は伊計漁港）に入る左岸の陸繫島の岩山の上にある。グスクは船着場を挟んで集落と相対峙する恰好となるために、地形的には港となる入江をグスクと集落が抱きかかえる形となる。

伝承によると、「アタヘチクドン」という按司が居城していたグスクだったといい、対岸の泊グスク（宮城島所在）の城主「川端イッパー」とは事あるごとに領域の拡大を狙って相争っていたといわれている。^⑨

グスクが機能していた時期は、表面採集で得られた貿易陶磁器により14～15世紀頃と



伊計グスク

考えられている。朝鮮の李朝成宗2年（1471）に申叔舟が編集した『海東諸国紀』に池具足城と記されているのがこのグスクではなかろうか。

グスクの周辺は天然の断崖によって囲まれているが、東側から南南東側にかけては崖面が急峻さに欠けるため防御上の構造物はこの部分に集中して見られる。虎口（ニ）もここに開いているが、合横矢を効かしているのが特徴的である。グスクに登る路は砂洲によつてつながった（イ）から開いており、断崖の下を潜るようにして（ロ）の平場に出、しばらくして右折し虎口に至ることができる。グスクに登る路は断崖の真下を通ることになるために断崖の上に位置する城内からは城道が完全に抑えられる。

虎口の防御は完璧で、左右に土壘と石垣があるために横矢が効き攻城軍の侵入を許さない。曲輪Ⅱは、自然地形をわずかに残しているものの中央部が平坦となっており、その中に「城之殿」（②）がある。現在曲輪内がはブッシュに被われているため中の様子を掴むことはできないが、戦争前夜の増産運動の時期に青年団によって芋畑として開墾されたといわれ、この時にかなりの地形的改変を受けたといわれている。

グスクの南の先端、標高49mを測る城内で最も高いところに曲輪Ⅰがある。この曲輪の下には二段の小曲輪を設けており、曲輪Ⅰに登ってくる敵兵を迎え打つ構えをとっている。曲輪Ⅰとの比高差が2～3mあるので、防御上の要として小曲輪の存在は非常に有効である。曲輪Ⅰは50m×30mの規模を有し、比較的広い平場であり曲輪の先端にはコンクリート製の祠が置かれている。この祠の中には大形の貝が奉納されている。この曲輪Ⅰが主郭であろう。曲輪に立つと西に金武湾、東に太平洋を望むことができ、また、隣接する宮城島の泊グスクは対岸にあって指呼の間にある。また伊計の入江は（現在伊計漁港になっている）グスクのすぐ下に広がり、船の出入が手に取るようになる。

（ロ）と（ハ）の平場からは表面採集によって14～15世紀に属する貿易陶磁器が数多く得られる。この一帯は削平地となっていて、グスク時代に属する遺物包含層が確認される地区である。したがって居住区だった可能性もある。（ハ）は海に突出する岩の上を人為的に加工しており、何らかの施設があった可能性が高い。この（ハ）に隣接する海岸ベリ等でも貿易陶磁器が採集される。また、（ハ）に隣接して小さな砂浜（ホ）があり小舟が接岸できるようになっている。

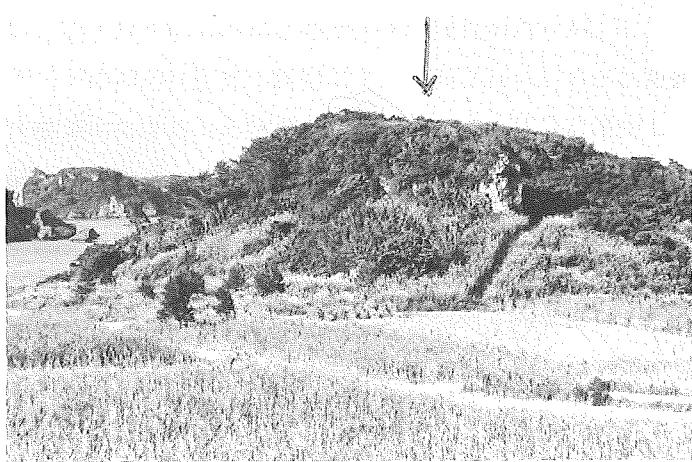
このグスクは島陰となる入江（現在は伊計漁港として使用されている）に面し、入江に貿易船を引き入れ取引を行うためには好都合だったとみられることから、東海上における交易の拠点としてのグスクだった蓋然性はきわめて高い。

泊グスク

①与那城村字宮城、②トマイグシク、③④⑤——、⑥川端イッパー、⑦14～15世紀、



泊グスク



泊グスク遠景(西より)



泊グスク(大手の城道)



泊グスク虎口に残る切石

⑧野面石垣・切岸・土塁、⑨300m×80m、⑩比高約15m、⑪『沖縄の城跡』新城徳祐著。

このグスクは、与那城村字宮城の泊原に所在する。太平洋に突出する琉球石灰岩からなる独立した岩山の上に営まれたグスクである。四面とも断崖絶壁であるが、南南西側に僅かに緩い傾斜面があり、そこに虎口が取りついている。北と西側の面はキノコ状の切り立つ断崖を形成しておりそこには障壁としての石垣は見られないが、東側から南側にかけては、無理をすれば容易に攀じ登れる崖面であることからここには約1～2m幅の石垣が築かれている。高さについては自然崩壊が進行しているためはっきりしないが現在高で最大2mの石垣が部分的に残存する。

伝承では「川端イッパー」という按司が城主だったといわれている。伊計グスクと泊グスクの争いの状況について新城徳祐氏は次のような伝承を記録している。^⑫

「昔のこと、泊城の城主は川端イッパーといって、大そう力の強い武士が住んでいたそうであるが、同じころ、前方の伊計島の伊計城にはアタヘチクドンが、城主として住んでいたという。泊城主の川端イッパーと、伊計城主のアタヘチクドンは、いつも勢力争いをしていたそうであるが、どうしても勝敗がつかなかった。そうしているうちに、伊計城主のアタヘチクドンは、次のような策略をもって泊城主の川端イッパーを滅ぼした。ある冬のこと、北風が吹きあれたので、これ幸いなりといって木灰を空高く投げつけさせた。それで泊城内の武士たちをはじめ、城主の川端イッパーは力つきて敗北し、ついに城下のオクシノ寺という洞窟で自殺して相果てた。」

戦いの様子が非常に幼稚でありあくまで伝承の域はでないが、グスク時代には隣接する按司同志が利権を巡って争っていたことは事実であり、グスク時代の緊張した状況を反映していると思われる。

岩山は南北に細長く、南北両端にピークがあり、北のピークはほぼ平坦になっているが、自然地形もわずかに残している。現在、熱帯樹によって覆われているために輪郭が掴みにくく判然としない。南のピークは30m×50mの削平地（I）で、城内北よりに石積みの根石らしいものが確認されるが、曲輪内を区画する石積みかどうか判然としない。この曲輪の周囲には断崖の縁辺部に石垣が認められる。IとIIIの間には一段下がって曲輪IIがあり、その南南西側に虎口（イ）が開いている。この曲輪IIは約1m前後の段差で東西に分けられそうであるが明瞭な区画があるわけではない。西側の石垣沿いに香炉を置いた拝所がある。IIの曲輪の断崖縁辺にも野面の石垣が築かれ城壁としている。

IやIIIの尖端部は削平段となっていてそこに立つと視界が開け太平洋が一望できる。またIの郭内からは城下の平野部を見下すことができ、IIIの郭内方からは対岸の伊計グスクや伊計の集落をはじめ太平洋の波打つ白波が望めて絶景である。（イ）の虎口を出ると

城道が南に向かって伸びている。とくに虎口近くは厚く高い野面の石垣によって防御されており、下からの登り口も狭められている。今では石垣が崩れていて往時の姿をとどめてないが、四角に加工された切石も若干見られることからかつては石垣のきちんとした城門だった可能性は高い。虎口への城道は崖下を縫うようにしながら通っており、東側は切岸となって落ちるが、その下には山の裾部を取り巻くように曲輪（IV）が認められる。この曲輪にはアダンの木が密集しているため輪郭はとりにくい。城道の西側にも二段の小曲輪が連なる。

城内には遺物包含層が確認されグスク系の土器や貿易陶磁器が採集される。崖下でも若干遺物が採集されるが城内から投棄されたものであろう。城内に居住空間があったことは遺物包含層の存在により明らかであるが、発掘が実施されてないので地下遺構については未確認である。グスクの時期は、貿易陶磁器の年代観から14～15世紀頃と見られる。

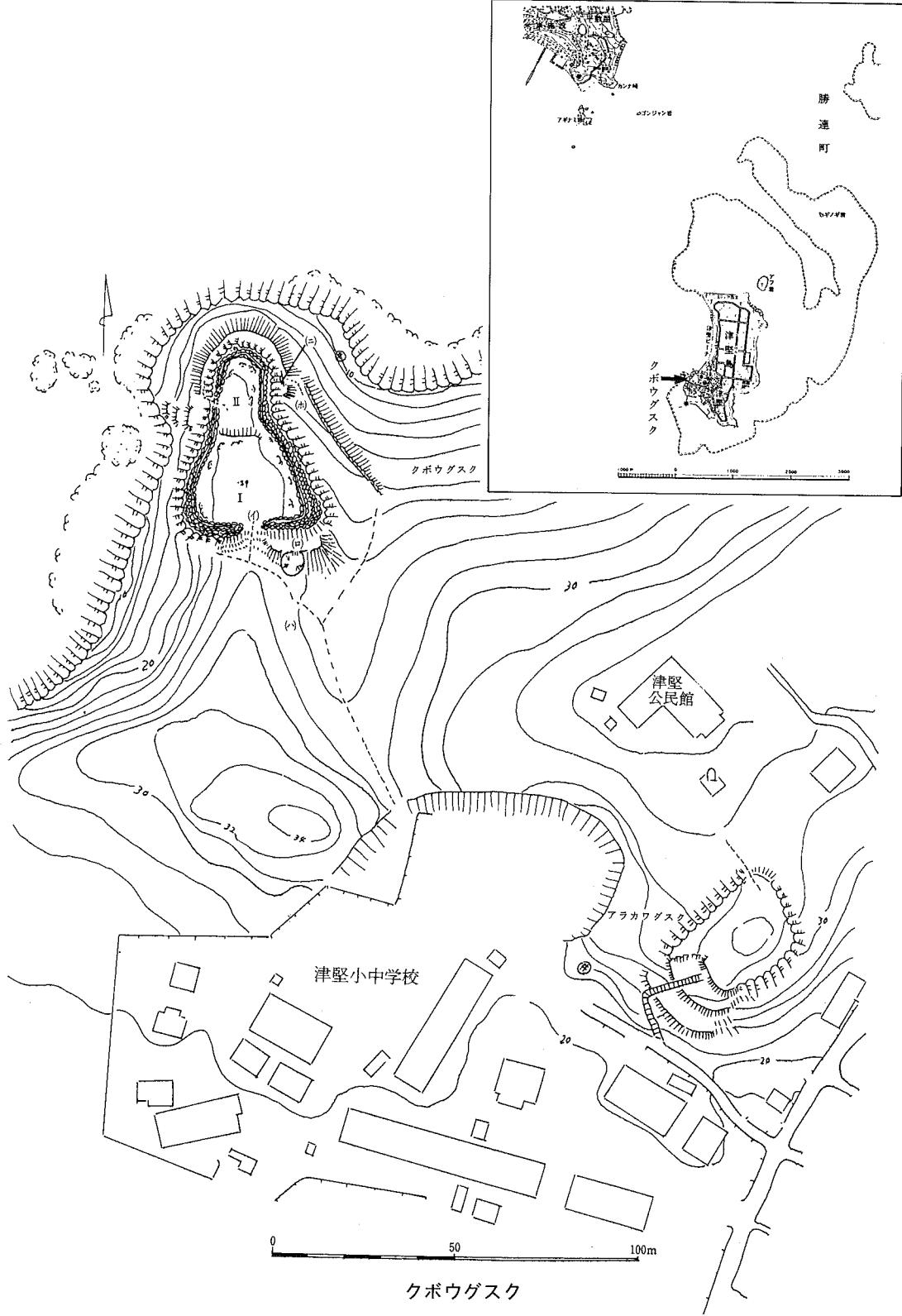
グスクが水田となる谷間を背にして海岸に迫り出す岩山に立地していることを考えると、食料生産をおこないつつもやはり海上貿易を指向する集団が築いたグスクの可能性を考えることができる。

グボウグスク

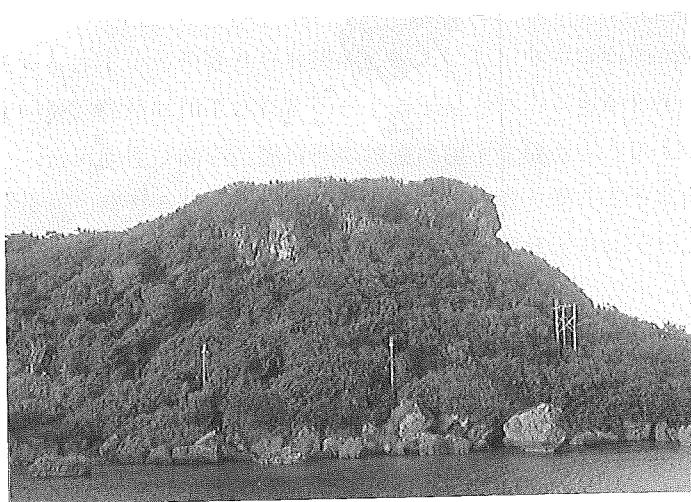
①勝連町字津堅、②——、③④⑤⑥⑦——、⑧野面石垣・切岸、⑨60m×40m、⑩比高28m、⑪勝連町史。

グスクが所在する津堅島は、沖縄本島中部与勝半島の南東約5km、太平洋に浮かぶ周囲8kmの小島である。中城湾の入口に面し、湾に向かって航行する船がよく見える位置にある。クボウグスクはこの津堅島の西海岸にあり、海に突出した琉球石灰岩からなる岩山の上に営まれた小規模グスクである。グスクの由来については至近距離にクボウ御嶽があることからそう呼ばれているようであるが御嶽との関連性は薄いとみられる。

グスクは、標高29mのピークを中心に二つの曲輪とそれを取り巻く小さい腰曲輪となる。周囲は断崖に面し、南側の一方だけに限って緩い斜面となって内陸部に接続する。虎口（イ）はそこに開いている。坂虎口となっていて幅1m程の階段が取りついている。階段の東側、すなわちグスクに向かって右手前に切岸をもつ小曲輪（ロ）が虎口に向かう大手道を抑えるかのように設けられている。（ロ）の南に隣接して大きな陥没穴があるが、沖縄戦によるものである。このグスクの周辺や地下には日本軍の陣地が構築されており、今でも荒れ果てた陣地壕が残存し、戦争の生々しさをとどめている。昭和20年この島に米軍が上陸を開始し、それを阻止しようとする日本軍との間で死闘が繰り広げられたという。事実、岩陰などには現在でも砲弾の破片や軍靴等が散乱している。虎口の南前方は



クボウグスク



伊計グスク遠景(西より)



クボウグスク遠景(西より)



クボウグスク(北より)

クバの木が密生する山となっていて、そこにコンクリート製の小さな祠（ハ）が建立されている。オヅカサノ御イベを祀るクボウ御嶽である^⑩。また、グスクの南東約150mのところには島の最高頂標高33mの丘をピークとするアラカワグスクが位置している。

曲輪Ⅰは標高29mで、25m×20m規模の削平地である。崖の縁辺部には野面の石垣が積まれている。石垣の幅は厚いところで2～3mもあり、往時は比較的高い石垣だったよう見受けられる。とくに東側の緩い斜面には幅の厚い石垣が見られるが、その石垣はかなり崩壊しており、崖下には崩れた石が散乱している。曲輪Ⅰの北には一段下がって曲輪Ⅱがある。曲輪Ⅱは南北に細長く、15m×10mの規模を有している。曲輪の先端部に立つと目の前に与勝半島を望み、中城湾が180度の視界で入ってくる。Ⅱの西側斜面に小さな腰曲輪が三段設けられている。また、北東側の崖下には岩陰を利用した古墓（ニ）があり、そこへの墓道（ホ）が現存している。古墓の中には遺骨は入っていない。どこかに移葬されたのであろう。墓の内部も荒れはてている。この墓の下方、標高10mの海岸べりにはイヌチガードと呼ぶ井泉が存在する。

津堅小中学校の裏手からグスクに登る路を行くと、左手を曲がるとグスクに通じ、右手に曲がって行くと海に下りられる。付近の海岸は岩礁が発達した地域であるが、ところどころ岩礁が切れるところがあり、そこには小さな砂浜が見られ、小舟が上陸するには恰好の場所になっている。このグスクは、海に突出するという特異な形態をとっており、海上貿易と関係するグスクだった可能性が高い。グスク周辺からは14～15世紀に属する貿易陶磁器が採集される。^⑪

ティミグスク

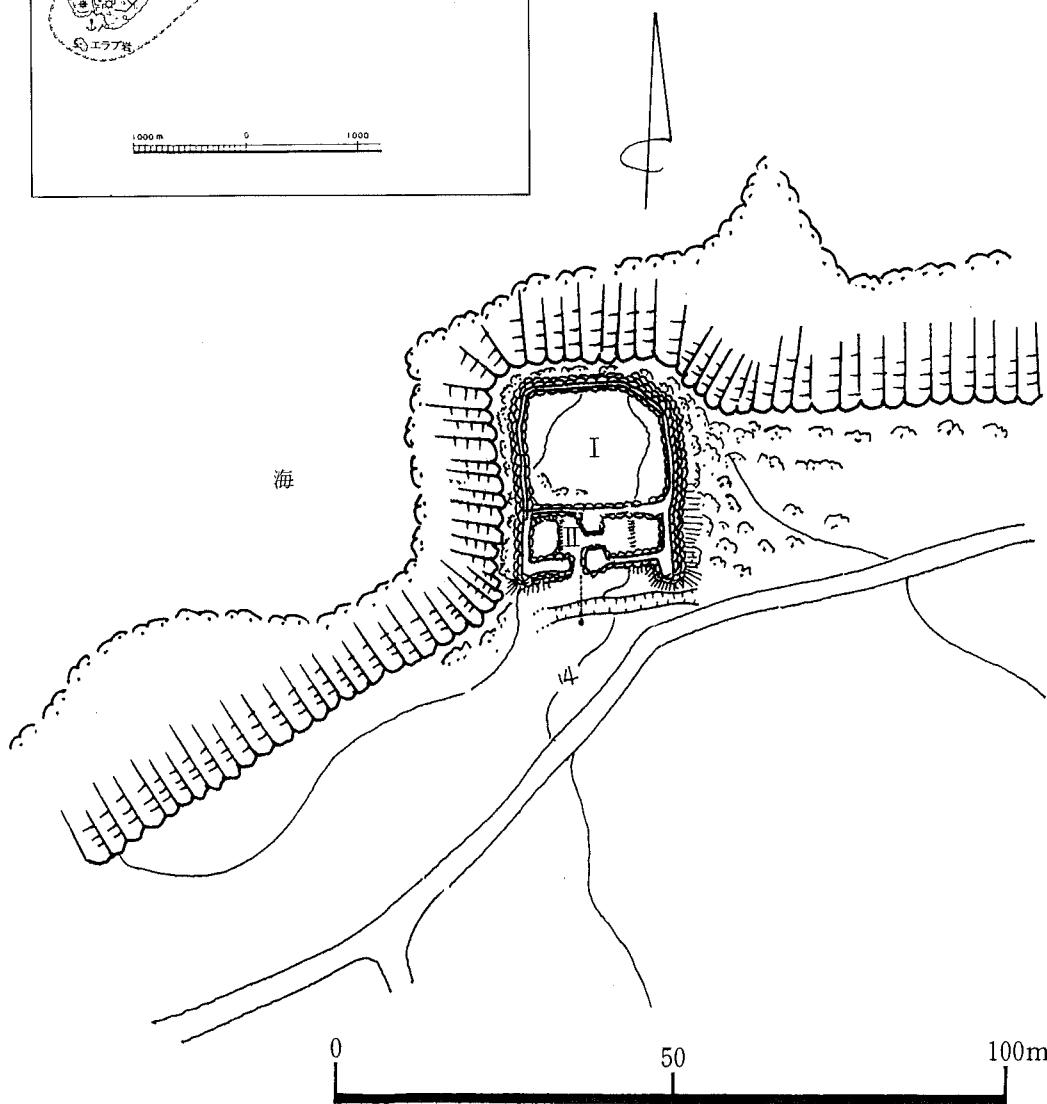
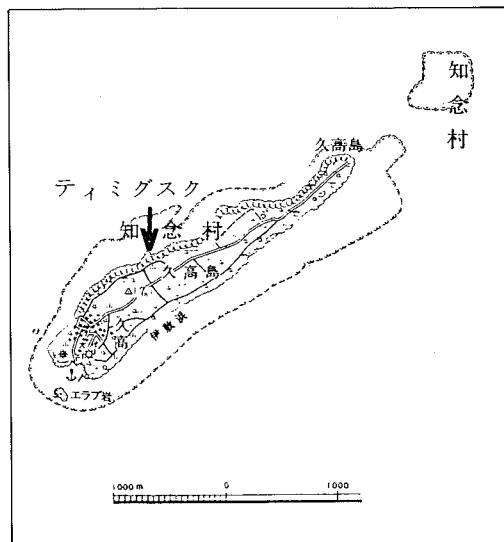
①知念村久高、②③④⑤⑥——、⑦14～15世紀、⑧野面石垣、堀切、⑨25m×35m
⑩15m、⑪——。

このグスクは、久高島のほぼ中央部北西海岸に突出する石灰岩上に営まれた野面積みの小規模グスクである。グスクが所在する久高島は、沖縄本島南部の知念半島東方約5,5kmの太平洋上に浮かぶ全長3,2kmの小島である。

グスクは現在の集落から約1kmほど行った北東の方角にあって村人の居住空間から離れて立地している。近くには神事を行う際禊ぎの井戸となるヤグルガーや沖縄で最初に麦を蒔いた場所として伝承されるハタスバル等がある。

平面形態は、南北を長軸とする長方形を呈し周囲を琉球石灰岩の野面積みがめぐっている。先端部、つまり北側は急崖をなして海岸に接し、前方（南側）は内陸側へと続く。

曲輪Ⅰは先端部にあって、18m×14mの規模を有する主郭である。現在アダン等の海浜



Tami

ティミグスク



久高島ティミグスク遠景
(西より)



ティミグスクの石積(北より)



ティミグスクの虎口付近

植物によって覆われているために内部の様子はつかめないが、平坦に造成されており土木地業が行われたことをうかがわせる。この曲輪の周囲は幅約2m、高さ1.5mの野面の石垣がめぐり、明らかに防御を意識した曲輪だということがわかる。曲輪Ⅱは南側の虎口に直結し、幅3m、長さ12m程の細長い曲輪である。中間に仕切りが入り二つの小曲輪に分割されている。西側には方形の櫓台が置かれ、東側の隅は一段上がり、そこよりⅠの曲輪に入ることができる。曲輪Ⅱには三つの香炉が置かれ、それぞれに中山・南山・北山への遙拝と記されている。Ⅰの虎口は南に向いて開けられており、その前面にはほぼ1m前後の浅い溝が東西に走っている。小さい堀切の可能性がある。

筆者は曲輪Ⅰの城内から蓮弁文の青磁碗を表面踏査によって一点採集したが、グスクの南に隣接する畠や原野からもグスク時代の遺物が採集されている。貿易陶磁器の年代観は14~15世紀のものである。^⑨

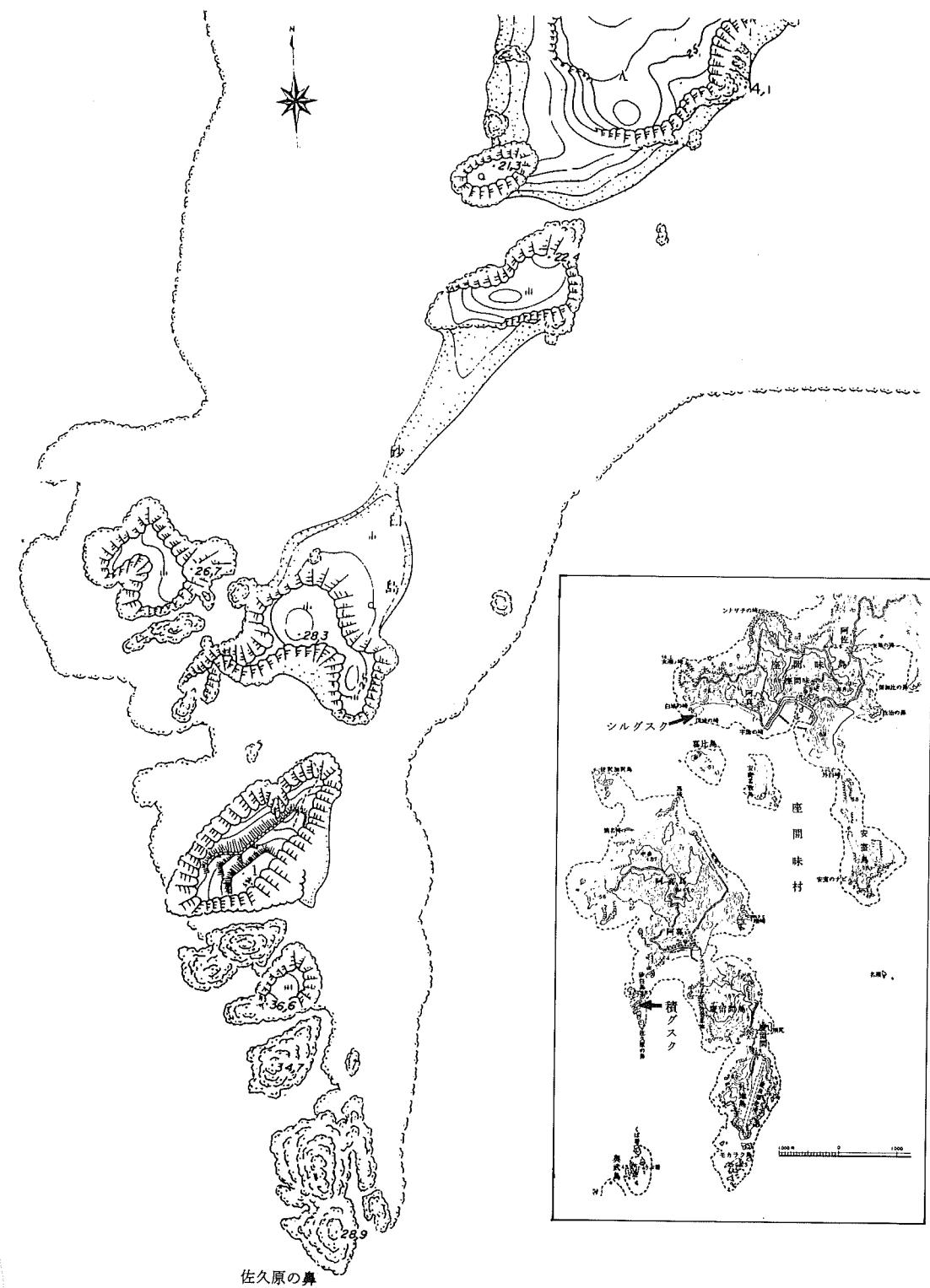
このグスクも、先のクボウグスク同様中城湾の入口に面し、湾内に入ってくる貿易船をすばやくキャッチできる位置に営まれている。グスク近くの海岸には小さな砂浜があり、礁湖の切れ目もあることから貿易船を引き入れたりするための海外貿易に関連するグスクだった蓋然性はきわめて高い。グスク内や周辺の畠地から貿易陶磁器が数多く採集できるのはそのことを裏付けるものであろう。

積グスク

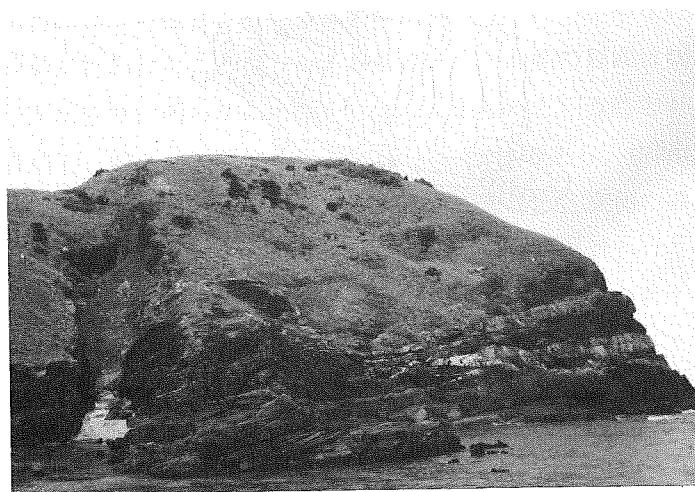
①座間味村字阿嘉、②ツングスク、③④⑤⑥——、⑦14~15世紀、⑧野面石垣・切岸、⑨100m×30m、⑩45m、⑪座間味村史。

このグスクは、阿嘉島の南西、スナシルの南に隣接するサクバル岩瀬中の中央部、比較的大きな岩瀬に立地する。この岩瀬まで行くには、干潮時を見計らいながらスナシルの高い岩瀬を越えてリーフ内を歩いて渡らなければならず容易でない。グスクまで行くには往時としても大変な苦労を伴なったものと思われる。それほど通行条件の悪い場所に立地しているのがこのグスクの特徴点の一つである。伝承によると、对中国貿易による宝物を狙ってしばしば海賊が攻め入るのでそれを防ぐために築かれた城だと言われている。^⑩

グスクが立地する岩瀬の平面形態は、北東-南西方向を底辺とする三角形である。その上に形成されるグスクは標高45mをピークに北西の方角に向かって傾斜し、この傾斜面を削平した四つの平場から成る。最も高い位置にあるのが曲輪Ⅰで、その下に三段の小さな削平地が離段状に続いている。石垣は断崖が緩慢な北西側の中腹面をとりまくようにめぐっており、その幅は約1m、高さが約60~70cmを測る。石垣の高さがあまり高くないのは、海風が強く吹きつける岩場の上に積まれていて長い年月の間に石垣上部の方が崩壊



積ゲスク



積ゲスク遠景(西より)



積ゲスク
(曲輪内のアダンと石積)



積ゲスクの石積

したからではないだろうか。

敵の侵入を防ぐために比較的緩い斜面に石垣をめぐらし、ところどころに小さい削平地を設けて撃迎の構えが取られていることからすると、小規模で単純な構造でありながらも軍事的に防御を意識してつくられたものだということが理解される。

岩瀬に登れる場所は北東方角のみに限られここに虎口が取りついている。虎口の作りは明瞭でないが、根石から判断する限り石積みによって固くガードがなされていたのであろう。この部分の根石を見ると他の根石に比べかなりしっかりした作りになっている。

石垣の素材は周辺で取れる自然の石を加工せずにそのまま使用し、大きさは頭大からそれよりやや大きめのものが多く使われている。

シルグスク

①座間味村字阿真、②阿真のシルグスク、③④⑤——、⑥シンマノヒヤー、⑦13~14世紀、⑧野面石垣・土墨・切岸、⑨44m×35m、⑩35m、⑪座間味村史。

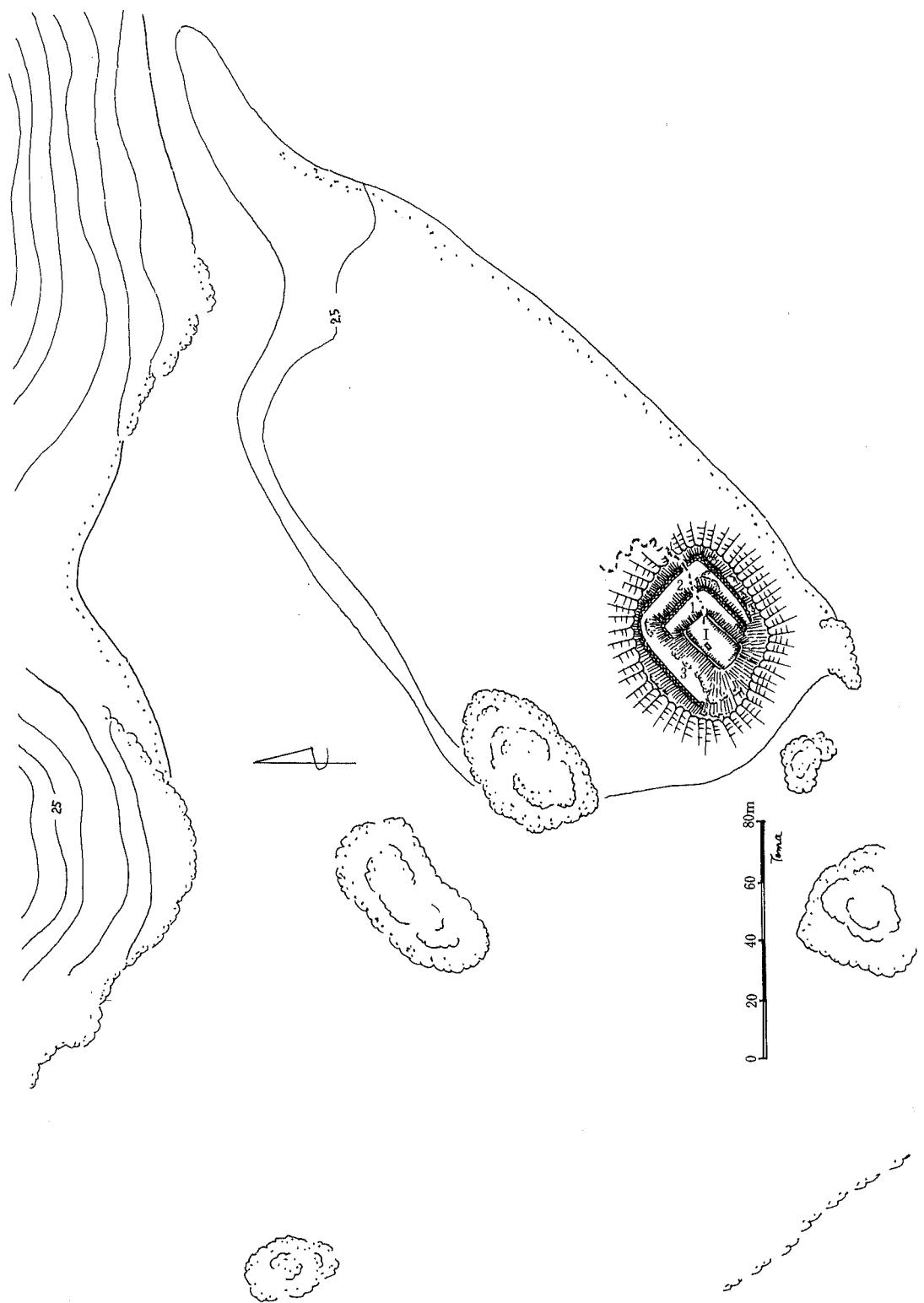
阿真集落の西南端、海に突出する岩山の上に築かれたのがシルグスクである。国土基本図ではこの一帯を深城の崎と記している。グスクが立地する岩山は標高35,5mをピークにピラミット形の形状をなし、その裾野は砂州になって小さな島を形成する。満潮時には島に渡ることができなくなる。

グスクの頂上は18m×8mの規模を有する曲輪Iである。この曲輪が主郭であろう。曲輪Iの四方は切岸になり登りにくく城壁の役目をする。北西と南東の縁には痩せた土墨がかすかに残っている。現在この曲輪には祠があり、旧暦8月11日と9月9日には阿真集落の各家庭から一人ずつ参加してシルグスク拝みが行われる。^⑪

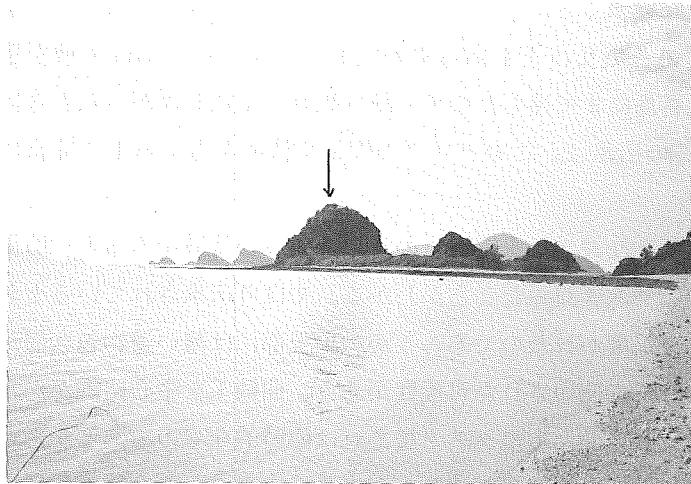
曲輪Iの下には石垣の障壁を有する腰曲輪が北西側に一段、北東側と南東側にそれぞれ二段作られている。南西側は切り立つ断崖が迫っているために切岸だけで終わり腰曲輪は取り付けられていない。腰曲輪1・2・3は崖を攀じ登って来る敵を意識したものであり、曲輪Iを防御するために緻密に計算されたつくりとなっている。主郭Iの虎口は東北東に開いており、腰曲輪1と2を跨ぐ形で曲輪Iに入る。主郭を中心として求心力の強い曲輪配置になっている。グスクの下から頂上へと進むには、等高線沿いにジグザグにカーブしながら登っていくが、急な坂道のために容易なことではない。現在は、村当局によって偽木による階段が取りつけられ、幾分登りやすくなった。

このグスクには、シンマノヒヤーという人物の伝説が残っている。座間味村史から引用すると次の通りとなる。

「昔、シンマノヒヤーという人が、何かのことから渡名喜島と戦争を引きおこし、敵軍



シルグスク



シルグスク遠景(西より)



シルグスクの石積



シルグスク主郭

の来襲から身を守るためにこの城をつくったという。この人は力持ちのうえに勇敢で、刳舟一隻分の石を両脇に抱えて、八、九丈ほどもあるその険しい岩山に運びあげて城を築き、彼が投げる石弾は遠く渡名喜島にまで達したので、敵は恐れて来寇しなかったと今に伝えている。」以上であるが、この伝承は、このグスクの性格や機能を考える上で非常に示唆的である。

切り立つ岩山の上になぜこのようなグスクを築いたのか。縄張りの特徴をみると、防御を意識つつ、非常に求心力の強いグスクだったことがわかる。やはり伝承されているとおり外敵への備えとしてこのグスクが築かれたのであろうか。頂上部には薄い遺物包含層が確認されることから居住空間としても使用された可能性があり、曲輪Ⅰを中心に誰かが常駐していたことが考えられる。見張りのためのグスクであれば臨時的なものであるから遺物包含層は存在しないはず、このグスクの性格や機能をどのように考えるか今後の課題としたい。

なお、グスクの登り口に近い平地からは若干の貿易陶磁器が採集される。時期的には13~14世紀に属するものである。

スンジャグスク

①渡名喜村、②③④⑤⑥⑦——、⑧野面石垣、⑨70m×25m、⑩60m、⑪渡名喜村誌。

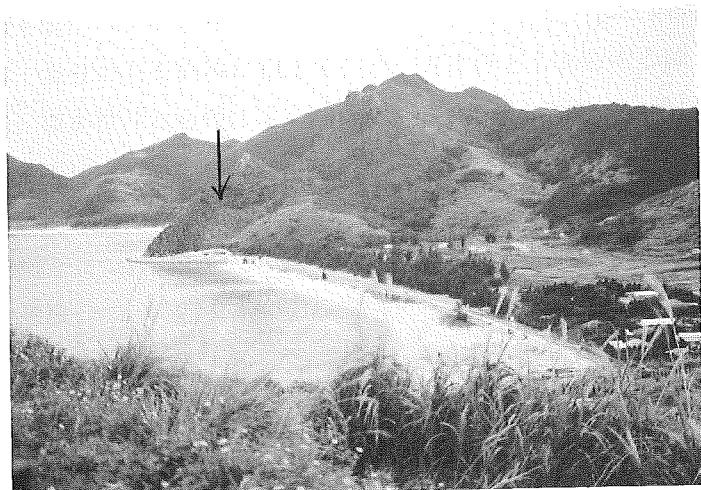
渡名喜島の東海岸側、古生期石灰岩の切り立つ断崖の上に占地するグスクである。渡名喜島は、那覇の北西約55km、面積およそ3,34平方kmの小さな島である。

このグスクは、古生期石灰岩のゴツゴツした露頭岩の上に石垣を積みあげて築かれており、城内はほとんど自然地形のままである。防御構造としては石垣だけであるが、一番弱点となる北面する傾斜面に野面石垣をまわして障壁とし、東は数十メートルの断崖絶壁となって海に落ち、西は小さな谷間を形成している。したがって、地形的にはピーカー部を中心として独立した一つのエリアを形成することになる。縄張図からもわかるように等高線に沿う形で石垣による二重のバリケードを築いた形となる。下方の平地部から登ってくる寄せ手を意識していることは明らかである。

石垣の素材には古生期石灰岩を手ごろの大きさに割って使用している。現在高が低いところで1m、高いところで約2mある。また、石垣の幅は約1,5mを測る。

このグスクの縄張り的特徴は、自然の地形を巧みに利用して、険阻なところをそのまま生かし、そうでない部分には障壁としての石垣を二重にめぐらすことによって、臨時的な逃げ城のような構造をとっていることであろう。^⑪





スンジャグスク遠景(南より)



スンジャグスク石積

以上の縄張り構造から考えると、島人たちが有事の際緊急避難のために逃げ込むための避難所としての城だった可能性が高い。事実、島に海賊が攻めてきたときグスクに登って難を逃れたという伝承がある。

おわりに

本稿では沖縄本島およびその周辺の離島に所在する小規模グスクの縄張り構造について述べてきた。これらのグスクの多くが今では村人たちの間で拝所として信仰されている。しかし、グスクが聖域空間として利用されていたとしても、かつては何らかの軍事的な必要性に応じてつくられていたことは縄張図で見ると明らかである。断崖や急傾斜に面する

側の石垣は一重だが緩傾斜に面する側は外郭や腰曲輪をつけるという工夫をしたり、あるいは自然の地形を巧みに利用して、険阻なところをそのまま生かし、そうでない部分には障壁としての石垣を二重にめぐらしているという例などはこれらの小規模グスクが防御性を意識して築かれたものであることを証明するものである。

これまで見てきたグスクの共通項を抽出すると概ね次のとおりとなる。

- ①石垣や切岸によって防御された削平地を有していること。
- ②大海原を望む海岸や入江に面していて海を意識してつくられていること。
- ③小規模で単純な曲輪配置でありながらも防御性を強く持っていること。
- ④戦いの伝承や外敵から身を守ったというような伝承が残っていること。
- ⑤城内やグスクの周辺から14～15世紀に属する貿易陶磁器が採集されること。

以上であるが、防御された平場すなわち曲輪を有している事実は、たとえ小規模グスクとはいえ緊張した社会的状況を反映して作られており、戦い、守るために創出された城そのものだという認識をもつべきであろう。14～15世紀の琉球社会は、環中国海をめぐる貿易の中心的な位置におどり出た時期でもあり、このような時代的背景のもとにグスクが発展し、やがて離島各地にも数多くのグスクを誕生せしめたのではないかろうか。今後このような小規模グスクにも目を向けながらグスクの全体像にせまっていく必要があると思われる。

本稿を終えるにあたり、グスクの縄張り調査に御協力いただいた田原真孝氏、宮城伸一氏、山中久司氏、池原秀光氏、与儀達憲氏、矢沢秀雄氏、比嘉元子氏、安座間勝枝氏、花城潤子氏の方々に末尾ながら記して感謝申し上げます。

註

- ①拙稿「グスクとその構造」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年3月。
- ②拙稿「グスクの縄張りについて（上）」『博物館紀要』No.19 沖縄県立博物館 1993年3月。
- 拙稿「グスクの縄張りについて（下）」『博物館紀要』No.20 沖縄県立博物館 1994年3月。
- ③千田嘉博「中世城館縄張り調査の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991年11月。
- ④『伊平屋村史』伊平屋村史発刊委員会 1981年12月。
- ⑤『伊是名村史』下巻 伊是名村史編纂委員会 1989年3月。
- ⑥拙稿『城—城に語らせたい地域の歴史—』沖縄県立博物館 1992年3月。

- ⑦前掲 註⑤。
- ⑧手塚直樹「伊是名島の陶磁器」『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』伊是名村教育委員会 1980年3月。
- ⑨新城徳祐 『沖縄の城跡』(株)新報出版 1982年8月。
- ⑩前掲 註⑨。
- ⑪福田恒禎編『勝連村誌』 勝連村 1966年。
- ⑫『勝連町の遺跡』 勝連町教育委員会 1993年3月。
- ⑬『知念村の遺跡』 知念村教育委員会 1986年3月。
- ⑭『座間味村史』中巻 座間味村史編集委員会 1989年7月。
- ⑮前掲 註⑭。
- ⑯前掲 註⑭。
- ⑰拙稿「渡名喜島の遺跡」『沖縄県立博物館 総合調査報告書Ⅱ』1981年3月。